

閉じ込められたことばと開かれたことば

～よしひろくんと生活つづり方～

<高知> 細川 幹夫

■よしひろくんのつづり方

二〇〇四年二月四日。よしひろくんのつづり方で公開授業を行った。

ぼくのお兄ちゃん

四年 よしひろ

ぼくのお兄ちゃんは、ぼくと同じ小学校に来ていた。ぼくが一年生の時、お兄ちゃんは六年生だった。お兄ちゃんは、小学校三年生の時に、今のひまわり学級に入ったそう。今、中学校三年生で、養護学校に行っている。月曜日の朝、七時に家の近くまでスクールバスがむかえにくる。学校の寄宿舎で生活しているから金曜日の四時ごろまで帰ってこない。

一月十一日、日曜日。この日、先生がぼくとお母さんに、お兄ちゃんのこと話したいことがあると言ってきて、話をすることになった。ぼくが、初めてきくお兄ちゃんの話をお母さんがたくさんしてくれた。お兄ちゃんが、ダウン症だということもこの時初めて知った。

お兄ちゃんがダウン症だとわかったのは、生まれてから一年くらいたった時だと話してくれた。お母さんは、お兄ちゃんを育てていくときにつらいこともあったそう。ぼくは、どんなことがあったんだろうと思った。

ぼくがまだ生まれてないころ、お父さんとお母さんが、考え方のちがいで離婚する話があったそう。その時に三才だったお兄ちゃんが、お父さんとお母さんの手を取って重ねたそう。それで、お父さんとお母さんは、離婚をやめたと言っていた。お母さんは、ニコニコ笑いながら、

「その時、離婚してたらよっちゃん生まれてなかったね。」

と、言ってぼくの肩に手をまわした。

帰りの車の中で、お母さんが、

「今日、先生と三人で話ができてよかったね。」

と、言った。ぼくは、

「うん。」

と、言った。

一月十四日、水曜日の夜、宿題をしている時のことだった。ぼくは、お母さんに、

「ダウン症って何なの？」

と、聞いた。お母さんは、

「染色体異常なのよ。生まれてくる前からみんなと染色体の数がちょっとちがうのよ。」

と、言った。そして、ぼくの顔を見ながら、

「よっちゃんには、まだ、むずかしいね。」
と、言った。やっぱりぼくにはむずかしいなと思った。ただ、お兄ちゃんはダウン症のために苦しいんだろうと考えた。お母さんは、
「だけどね、たとえ『障害』があっても同じ人間、同じ命。」
と、話してくれた。ぼくも、それはわかった。お母さんの言う通りだと思った。
でも、ぼくは、お兄ちゃんのことをずっとはずかしいと思ってきた。
ぼくが一年生の時のことだった。近所の友だちに、
「お前のお兄ちゃんおかしいぞ。」
と、言われた。ぼくは、
「うるさいな。」
と、心のなかで言った。
それから、その友だちに会うたびにいつも、
「養護学級。」
と、からかうように言われた。ぼくが、
「何でそんなこと言うが？」
ときくと、
「お前のお兄ちゃんが養護学級やき。」
と、言った。ぼくは、心のなかで、
「お兄ちゃんの悪口言うな。」
と、言った。
それからもずっと言われたけど、ぼくは、何も言い返せなかった。
ぼくは、お兄ちゃんのことだからかわれるのが気になっていた。三年生の音楽会の時、お母さんがお兄ちゃんと見にくると言った時、ぼくはお母さんに、
「お兄ちゃんつれてこんとってや。」
と、言ったことがある。初めてお兄ちゃんを見られたくないと思った。
また、こんなこともあった。それは、奈良からお母さんとお兄ちゃんとおぼくとで帰ってきている時のことだった。汽車が出発して少ししてから、お兄ちゃんが、
「どうぞ。」
と、言ってぼくにおかしを差し出してくれた。ぼくは、お兄ちゃんやさしいなと思いながら、
「ありがとう。」
と、言っておかしをもらった。そしたら、お兄ちゃんは急に手をパンパンたたきながらおどりをした。お母さんが、
「他の人のめいわくで。」
と、言ってもすぐにはやめなかった。まわりには、ねている人もいた。その時も、ぼくは、手をたたきお兄ちゃんをはずかしいと思った。
ぼくは、お兄ちゃんのこと、腹が立ったりいやだなと思ったりしたことが何回もあった。ぼくは、友だちにも先生にもお兄ちゃんのことを話さなくなった。
一月二十日、火曜日。ぼくはお兄ちゃんがどんな病気なのか知りたくて、休み時間に細川先生と図書室へ調べに行った。染色体は全部で四十六本あり、何番目の染色体が多いかによって、症状もちがうことが分かった。けれど、お兄ちゃんのことからは分からなかった。
ぼくはその夜、ごはんを食べた後、お母さんに、
「お兄ちゃんは、染色体の何番目が多いが？」
と、聞いた。お母さんは、本を出して指差しながら、
「この染色体がひとつ多いがよ。染色体がひとつでも多かったら『障害』になるがよ。」
と、言った。

「お兄ちゃんは、そのために他の人より成長がゆっくりで体よわいが。歩き始めたのも、二才を過ぎてからやった。」

と、教えてくれた。ぼくが歩き出したのは、一才になる前だったそうだ。お兄ちゃんは、心ぞうも悪く、手じゅつをしなければならぬということも聞いた。染色体は、手じゅつでは治らないけれど心ぞうはよくなるそうだ。

ぼくは、お兄ちゃんが手じゅつをして、元気になってくれたらいいのになと思った。

一月二十三日、金曜日。今日も先生とお兄ちゃんの話をした。今日は、お兄ちゃんのかぜをひいて学校を休んでいる。ぼくは、ちゃんとねてるかなと思った。

これは、お母さんと三人で話した時のこと、兄との日常の生活や忘れられないこと、大切なことといくつかの場面を区切って、教師といっしょに思い出しなおしをして書きあげたつづり方である。自分の伝えたいことがより明確になるように時間の流れを入れかえ、ひとつひとつの場面を確認しながらつづらせたものである。

主題は、兄の存在の再確認である。このつづり方は、今まで人に話さなかった兄のことを書き始めたことにねうちがある。そして、つづる過程によってよしひろくんの兄に対する認識が変わってくる。とりわけ兄の「障害」のことをもっと知ろうとして自分から働きかけた行いは、よしひろくんの認識の変容を表している。そのひとつは、お母さんに「ダウン症って何？」と問いかけたことであり、もうひとつは、自分から図書室へ行きダウン症について調べたことだ。これは、つづる作業を繰り返しながら深められていったよしひろくんの兄に対する認識の変容の度合いを表わしている。

そういう意味では、このつづり方は、今後のよしひろくんの兄（「障害」をもって生きる人）に対する認識のあり方のきっかけになると思う。

授業のねらいとしては、ふたつのことを設定した。ひとつめは、クラス子どもたちによしひろくんの認識の変容の過程を学ばせること。ふたつめは、文章表現における組み立ての意義である。授業の展開は、ふたつめのねらいを中心として構成した。よしひろくんの認識の変容の過程については、この学習全体を通じて読み取れると考えたからである。

この学習は、二年間の生活つづり方学習のまとめとなるものでもあり、三年生の時以来の歩みの普遍的課題である、「だいたいなことをありのままに、よくわかるようにつづること」の大切さを確認させ、今後の生活に対する関心が深まり、表現力にも生かされてくることを願った。

■よしひろくんの兄

私が、よしひろくんの兄のことを知ったのは、年度当初の家庭訪問の時だった。よしひろくんの兄はダウン症で、養護学校に通っていること、土曜日と日曜日には帰ってくるということによしひろくんのお母さんが話してくれた。そして、「お兄ちゃんに手がかかったぶん、よっちゃんには淋しい思いをさせてきたこともあります」とも話してくれた。お母さんは、淡々と話してくれた。私は、これまでに多くの苦労があったのだろうとは感じたけれど、それ以上、深く聞くことはできなかった。それでも、お母さんからは兄のことを知ったうえでよしひろくんのことも見てほしいという思いを感じることができた。

一学期の期末懇談の時に、お母さんはよしひろくんの兄を連れてきた。お母さんは、

「先生、お兄ちゃんも連れてきました」

と、言って教室に入ってきた。

「よっちゃんの先生よ。ちゃんとごあいさつしなさい」

と、お母さんに促されて、私に、

「こんにちは」

と、言ってくれた。お母さんの横に座っていた兄は、しばらくすると教室の中を歩いて本や工作をさわっていた。お母さんの、

「こうちゃん。何でもさわったらあかんよ。こっちきて座るとき」と、いう声がけで、また、お母さんの横に座った。

お母さんが兄と来たのは、時間の制約等何か理由があったからかもしれない。しかし、私に兄を紹介してくれるために連れてきてくれたのではないかとも感じた。前回の家庭訪問で話されたことと、その時初めて会った兄とを重ねてお母さんの話を聞いた。

私は、お母さんからよしひろくんの兄のことを聞かせてもらった時、そしてこの日会った時から、よしひろくんには兄のことを少しずつでもつづってもらいたいと思った。そのために、しなければならぬことがたくさんあった。

■この子にこのことを

次の文章は、三年生のときによしひろくんが書いたものである。

二学期

三年 よしひろ

今日は、新学期の始まりでした。家を七時半にでました。学校に、八時五分につきました。かいだんをのぼる前にしゅうとくんがいました。ぼくは、

「おはよう。」

と、いいました。しゅうとくんも、

「おはよう。」

と、こたえてくれました。

ぼくは、しゅうとくんといっていると、しこうくんがかいだんからおりてきました。ぼくとしゅうとくんは、また、

「おはよう。」

と、いいました。しこうくんも、

「おはよう。」

と、こたえてくれました。

いろんな話をしながらいっていると三がいにつきました。三組に入るとみきお先生がきていました。ぼくは、

「おはようございます。」

と、いいました。

しぎょうしきが始まりました。てん校生のしょうかいがおわって三組にもどってそうじをしました。ランドセルをとって、みんなで、

「さようなら。」

と、いってかえりました。

友だちと会えたのがうれしかった。

マラソンのおじさん

三年 よしひろ

学校から帰っているときのことでした。神社の前のおうだん歩道をわたろうとしたとき、マラソンをしているおじさんがいました。年は四十代くらいでした。服はみどり色の長そでで、ズボンは黒のジャージでした。ぼくは、（ぼくも走ってみようかな）と思いました。ぼくは、

「決めた。走ろう！」

と、言って走り出しました。（略）

おじさんをぬかすことができました。それから少し走って、ぼくはつかれてピンク色のマンションのところで歩いていると、後から追いかけてきたおじさんが、

「がんばれ！」

と、言ってくれて、ぼくも、

「うん。」

と、言いました。(略)

次の朝ぼくは、(きのう会ったおじさん、今日も走ってないかな。)と歩きながら思いました。ぼくは、今日も走ろうと思って大的神社まで走って行きました。ぼくは、(今日は、あのおじさん走らんがやろうか?)と学校についても思っていました。(略)

えぼしの先生が、

「さよなら。」

と、言いました。ぼくも、

「さよなら。」

と、言いました。

ぼくは、走って神社に行きました。神社で待っていたけど、きのう会ったおじさんはきませんでした。ぼくは、(今日、おじさん走ってこないから、どこか体がわるいかもしれん。)と思いながら走って家に帰りました。

読んでもわかるように、本来、人との関わりをもちたいと思っているよしひろくんである。それが、一番身近な兄のことになる、なかなかそのことを表現してくれなかった。日常の当たり前からよけいに兄のことが見えにくくなっているのか、意識して兄のことを書こうとしなかったのかわからなかったが、よしひろくんは、三年生のときには兄のことを一度も書いてくることはなかった。そんなよしひろくんの文章を読みながら、大切な兄弟のことだから、兄との生活もしっかり見つめて書いてもらいたいと私は願った。

生活つづり方指導は、「なに」を「どう」書くのかで成立していく。その過程においてどちらが先とか後とかはない。並行して行わなければならない作業である。しかし残念なことによしひろくんには、大切な兄のことを書くための表現のしかた、つまり「文章をどう書くのか」という学習が基本的にとりななかった。それがたりないということは、生活を見つめる力がたりないということをも同時に意味している。それがなければ兄のことも十分には書ききれない。よしひろくんには兄のことを書いてもらいたい。それは先にも書いたように、私が彼の兄の存在を知ったときからの願いだ。そしてそれは、よしひろくんにとっての「つづることの意味」だと思う。そのことを目標において、当面は「どう書くのか」に軸足を置いて、三年生ではそのことにより力を入れて指導を重ねてきた。

私は、誰にでもよく分かる文章を書かせたいと願い、まずは、長く詳しく書くことを第一の目標とした。そのために、他の学校の子どもが書いたつづり方をほぼ毎日読み聞かせをした。文章の書き方として展開的過去形でつづること、あわせて文章表記の記号も正しく使えるように指導を重ねてきた。

具体的な指導としては、子どもたちには、文章を書くということは、よく思い出すことなのだと思がけをしてきた。そして、時間の経過を追って順序よく思い出すことや書き出しの一文の指導等も継続した。また、題材指導も視野に入れて、題材ノートと日記帳をほぼ毎日書かせることにした。そうすることで、子どもたちに何を書けばよいのかということを感じかせ、題材のねうちについても重ねて考えさせていきたいと思った。週に一度は必ず書く時間をとった。その前には構想表に書いてくることもさせてきた。

表現のしかたの指導については、読み聞かせの際の文話による指導と一人一人との共同の思い出し直しの場を主な指導の場としてきた。これらを一年間続けることによって、個人差はあるけれども展開的過去形で長くつづることができるようになってきた。

三年生の指導の成果の上にたって、四年生では題材指導(なにを書くのか)ということに重点を置いて指導を繰り返してきた。そのなかで、ある程度の題材の広がりも見られだし、学校や友だちのことから家族のことも書き始めた。

しかし、よしひろくんは、四年生になっても兄のことを書いてくることはなかった。母と兄とでおじいちゃんの家に行った時のことを書いても、そこには兄のことは書かれてなかった。私が、

「この時、お兄ちゃんは一緒じゃなかったの？」
と、問いかけると、
「うん、おったけど」
と、少し困ったように答えるよしひろくんであった。私は、
「今度、お兄ちゃんとのことを日記に書いてきて」
と、言った。

ボーリング

四年 よしひろ

土曜日に、お兄ちゃんとお母さんとぼくとでとでんボールに行ったときのことであった。最初に紙に書いて九レーンに行って、くつをかりてボーリング用のくつにはきかえた。ボールを選んだ。ぼくは六ポンドで、お兄ちゃんは八ポンド、お母さんが十ポンドだった。

はじめにお兄ちゃんがして九点入れた。ぼくの出番になってぼくは八点だった。お母さんは調子がわるくて八点だった。(略)

お母さんが、
「調子がでん。」
と、言った。ぼくとお兄ちゃんはジュースを飲んだ。(略)

最終的に一位はお母さんで九十八点、二位お兄ちゃん、三位がぼくで七十七点だった。ぼくは、「くやしい」
と、言った。(略)

よしひろくんは、私の単純な声がけだけでは、兄との日々の生活のなかでの大切なことを見つめなおすことはできなかった。私は、これまでよしひろくんが「障害」をもつ兄のことを書こうとはしなかったのは、兄に対して恥ずかしいという感覚をもっているのではないかと思った。このまま放置すれば、兄を恥ずかしく隠したい存在となるのではないかと思った。この価値観を翻すことがだいじだと考えた。

それは、私自身のことを思い出し、よしひろくんと重ねて考えていたからだ。

■私のこと

私は三人兄弟で二つ違いの弟と五つちがいの姉がいる。幼い頃は姉ともよく前の河原に遊びに行ったりする仲の良い姉弟であった。姉がどこかへ出かけるというと、「ぼくも行く」と言って裸足で追いかけて行った記憶もある、私の大好きな姉であった。しかし、いつのころからか、姉に原因が分からないいろいろな症状が出るようになってからは、自分でも気がつかないうちに姉を疎ましい存在として見るようになっていた。

姉は、急に意識がなくなったり目が見えなくなったりということが時々起こりだした。ある時は、深さが二メートルくらいの溝に落ち、這い上がろうとしていたのだが何度も落ちて、着ていたコートがびしょ濡れになってしまったり、またあるときには、街に出ていて意識がなくなり、その場に座り込んでいたこともあった。そんなときは、通りがかりの人が家に知らせてくれて、迎えに行く。また、他の症状では、人を見る意識が突然に変わることもあった。医者が言うには周りにいる人間がみんな敵に見え、自分に危害を加えるのではないかと思ひ込んでしまうそう。私を含めて家族をも誰なのか分からなくなる。そういう時には無理やりにでも姉を連れて帰ろうとするのだが、やはり周りの人の目が気になる。いつか、病院で診察を受けているときに、その症状が出たことがあった。病院の先生の眼鏡を手で払いとぼして、ベットの下に潜り込む姉を見たとき、私は全くの別人を見るような目で姉を見ていたような気がする。

そんなことがあっても、姉の記憶にはそれほどはっきりとは残ってないようで、次の日には「なんかまた迷惑かけたみたいやね。ごめん」と私に謝ってくる。姉もそんな自分にいらいらしてしまう

のか、心が荒れることも時々あった。自分の体をこんなにしたのはだれのせいなのかという思いであろうか、包丁を持って暴れることもあった。それを押さえようとした弟が、親指を切ったこともあった。はさみをふりまわした時には私が止めようとして、瞼の上を切り付けられこともあった。夜中に、屋上から道路にむけて食器を何枚も何枚も放り投げたこともあった。

そんなことがあり、自分でも気がつかないうちに姉に対する意識が変わってしまっていた私だった。

■母と兄との出会いなおし

私は、よしひろくんのお母さんに、
「お兄さんのこととよしひろくんのつづり方のことで少し気になることがあって、三人で話したいのですが時間をつくってくれませんか」

と、電話で連絡した。お母さんは、話の内容を詳しく聞くこともなく、すぐに日曜日に学校で会うことを約束してくれた。

当日、私が職員室で待っていると、お母さんが、
「先生、遅くなってすみません」

と、言ってよしひろくんと二人で入ってきた。

二人が並んでソファに座りその前に私が座った。私は、よしひろくんの方を見て、
「最初に先生のことを聞いてもらいたい」

と、言って私は自分の姉のことを話し始めた。よしひろくんは、私から目をはなさずにじっと聞いてくれた。時折お母さんの方にも目を向けると小さく頷きながら聞いてくれていた。

私の話が終わるとお母さんが、
「お姉さんの具合はどうですか？」

と、言った。

「私もお兄ちゃんの病気がわかった時にはとても悩みました。でも、今ではこのお兄ちゃんがいなくて本当によかったと思っています」

と、私のことばに答えるかのようにお母さんが語ってくれた。さらに、お母さんは、

「二年生までは、通常の学級に行ってたんですが、三年生に上がる時に当時の校長と学級担任の先生から「障害」児学級に入るようにと強く進められました。私は、多くの友だちと一緒に学校生活を送らせてあげたかったんですが、その願いは聞き入れてもらえませんでした。それで、しかたなく三年生からは「障害」児学級に入ることになりました。私は、将来お兄ちゃんもこの町でみんなと一緒に暮らしてもらいたいと願っています。そのためにも、みんなと自然に一緒にいられることが大切だと今も思っています」

と、学校教育に対する苦言と兄に対する願いを教えてくれた。

それから、兄が生まれてからの生活のなかでの様々な葛藤から、今にいたる兄への認識の変化や、よしひろくんが生まれてからの生活のこと、母からの願いを話してくれた。よしひろくんの兄のことを話すお母さんは、終始笑顔で私やよしひろくに語りかけてくれた。よしひろくんにとっても初めて知ったことがたくさんあったようだ。よしひろくんは、お母さんから聞く兄のことを大切なこととして考えはじめたようであった。

「お兄ちゃんのことを書いてみるかえ？」

という私の問いかけに、よしひろくんはお母さんを横に力強く、

「うん。書いてみる」

と、答えた。お母さんの話が彼がもっていたであろう兄へのわだかまりを溶かしたのかもしれない。

さっそく次の日から書き始めて、二週間ほどかかったが、その間、彼は一度もいやがることはなかった。そうして、私といっしょに推敲してできたのが『ぼくのお兄ちゃん』である。

授業の三日前よしひろくに、
「このつづり方、みんなの前で読んでみる？」

と尋ねた。これまで、クラスの友だちにも話したことがなかったお兄ちゃんのことを自分の知らない多くの教師の前で読むということは、たいへん勇気のいることだろう。そう考えた時、私の呼びかけには応えてはくれないかもしれないという不安もあった。でも、よしひろくんは、

「うん。読む」

と答えた。よしひろくんが私に、

「先生もお姉ちゃんのこと、みんなに言うが？」

と、尋ねてきた。私が、

「うん。みんなに先生のお姉ちゃんのこと聞いてもらうよ」

と、言うと、

「そうか」

と言った。私は、このことは子どもの同行者となるために欠かすことのできないことだと考えていた。

私は今度の授業を、私とよしひろくんの授業にしようとも思っていたのだった。

当日、私は授業のなかで、自分の姉のことを話した。話をしていると、その時々姉との生活の場面とその当時姉を疎ましく思っていた私の心が思い出され、つい目頭が熱くなり声が少しまつってしまった。それでも、子どもたちはシーンとして真剣に聞いてくれた。

授業のまとめとして最後によしひろくんがつづり方を讀んだ。私は、よしひろくんの側に立った。よしひろくんは、つづり方を両手でしっかり持ち、一文一文をていねいに読み上げた。少し大袈裟かもしれないが、私にはよしひろくんがその一文一文を読みながら、「障害を持って生きる兄」を自分の体に取り入れようとしているように見えた。クラスの子どもたちも、よしひろくんの読むつづり方を聞きながら、文章を目で追っていく。静けさの中で、よしひろくんの声だけが耳に入ってくる。つづり方『ぼくのお兄ちゃん』一点に集中した時間であった。

当日、授業を見に来ていたお母さんは、じつとよしひろくんの姿を見つめていた。

授業の後、

「じょうずに読めたね」

と言うと、よしひろくんは、

「うん。ぼくね、二日間読む練習しよった」

と、笑顔で言った。二年間あまり目にしたことのない笑顔だった。その笑顔を見ながら私は、「表現は解放である」ということばを思い出していた。

その後、何日かたったとき授業中に少し雑談になったことがあった。テレビを一日にどんな番組をどれくらい見ているのか。そんな話だった。それぞれ生活があるようで、「だいたいお父さんがチャンネルとちゅうきあんまり見れん」という子もいれば、「一日、一時間と決められちゅう」「じゃんけんでお姉ちゃんと決める」「ぼくの家は三台テレビがあるきいつでも見れる」という子どももいた。その時、よしひろくんが「はい。先生」と手を挙げて「ぼくの家はお兄ちゃんとチャンネルのとりあいになる」と大きな声で言った。多分、クラスみんなの中で「ぼくのおにいちゃん」と大声で言ったのは初めてだったかもしれない。少なくとも、私との二年間近くの中では、初めてであった。

■つづることから始まる

よしひろくんも五年生になり、私は三年生の担任となった。四月の半ばごろ数人の友だちと私のクラスへきた。

よしひろくんが、

「先生。お兄ちゃん今年、学級委員になったで」

と嬉しそうに話してくれた。また、

「ぼくもね、代表委員に立候補したけど落ちた」

と、少し残念そうであった。私が、

「えっ。立候補したが。えらいやんか。落ちてもかまん。立候補したことがえらいやんか。兄ちゃん

に負けんように頑張りや」

と、言うと笑顔で、

「うん」

と、答えてくれた。新しいクラスにも慣れたのか、ますます元気そうなよしひろくんであった。

六月のこと、よしひろくんの現在の担任の先生からこんな話を聞いた。私の学校では毎年、五年生が校区の近くにある、「障害」をもって生きる人たちが働く施設へ学習に行く。その事前学習でビデオを見ての感想文を書いた中で、二人の子どもから「『障害』をもっている人はかわいそう」というものがだされたそうだ。このままにしておいてはいけないと思い、担任はクラスの子どもたちに「かわいそうというのはどうだろうか？」と、このことばを投げかけたそうだ。そのことについては数人の子どもたちからも「それはおかしい」「それはちがうのでは」という趣旨の意見が出されたそうだ。最後に手を挙げて発言したのがよしひろくんで、

「『障害』のある人は、かわいそうと思われることは嬉しくないと思います」

と、はっきりとした、自信に満ちた声で言ったそうだ。

私は、このことは正直に嬉しいと思った。よしひろくんが兄を我が身に引き寄せて、兄と自分のこととして言ったのだと感じた。つづることの意味のひとつは、ここにもあると思う。

まだまだここでとどまてはいけないのであろう。兄を自分のかけがえのない大切な人としてこれからも生活していけるようにと願う。

